

FOR 友 ~ YOU

「知らなかつた
ごめんよ」

大熊由紀子
(朝日新聞論説委員)

ある真夜中、私たちの住むアパートに、一人の男が現れた。連載中の「ルポ・精神病棟」に文句があると大きな声でいう。隣家に申し訳ないのでID Kのわが家に招き入れた。

夫が潜入していた病院を退院してきただばかりの人物だった。連載の趣旨には、異論はないらしい。ただ、自分の振る舞いが道化っぽく描かれていて、仮名とはいえ著しく名誉を傷つけられたと興奮し、「どうしてくれるんだ」とすこむ。夫がいくら説明しても聞き入れない。懐ろにドスを忍ばせてあること、組に属していたことをほめめかす。電話の横に座り込んでいたので、

一一〇番もできない。

私は幼い娘が眠っている隣室に行つて「遺書」を書いた。「もし、私たちが殺されて見つかったなら、犯人は……」。それをふとんの下に隠した。その時、ベルが鳴った。

私は当時、科学部で健康面を受け持つており、ルポに合わせて「精神病院選び方の18章」という一ページ特集を企画していた。その相談にのつてくださった精神科医の一人からの電話だった。私はゲラを読み上げていった。
第一章 外観 まどわされるなかれ
第三章 車の便 感激することなかれ
第五章 ハナ 病室でビクビクさせよ

第七章 患者 みな眠そうなら疑え
第十八章 地域家族会 出席すべし

読み終わった時、男はぼつりと言つた。「おれたちのこと、こんなに思つてくれたなんて、知らなかつた。ごめんよ。さよなら」

精神病院の退院者に偏見を持つてはいけない、と頭では納得し、記事にも何度も書いていた。けれど、心からそう思えるようになったのは、この日からだった。

あれから十八年たった。
全家連は、見違えるほどの組織に成長した。小規模作業所の活動も目覚ましい。「遠い外国の話」として健康面で紹介したナイトホテルやハーフウェイハウスの考え方も不十分ながら精神保健法に盛り込まれた。

しかし、カナダやヨーロッパの国々との差はあまりに大きい。これらの国のモデル都市では、病院を縮小し浮いたヒトとカネを外の受け皿づくりにつぎこんで成果をあげている。こうした見識と計画性は日本の政治、行政、精神病院長には期待できないのだろうか。